

銀

Bブロック 全作品と講評



www.columnland.net/

にて作者さん&読者さんの声実況中

『銀のス

プーン

をくわ

えて生

まれる』

とは『裕

福な家

庭に生

まれる』

ことの象

徴である。

しかし裕

福な家庭

に生まれ

育つとい

うならば

妬み嫉み

の的にも

なろう。

銀は貴金

属であるが、

硫黄や

砒素化合

物と反応

して変色し

やすい。例えば

黒色の硫化銀 (Ag₂S)

のように。昔ヨーロッパ

で経済力のある人々が銀食

器を使用していたのは、毒

を盛られた際に食器の変色で

いち早く異変に気付けるよう

にするためでもあったとい

う。人々は銀の食器の持ち

主のような生活に憧れていたが、

持ち主たちはどうだったであろ

うか。「豊かな食事を彩る輝き

が失われてはいないか」と、

日々恐れていたのかもしれない。

遅い時間に家に帰るとき、家に帰るまでの退屈な移動時間によく空を見上げている。子供のときから空を見ることは好きだったから昔見た夜空もよく覚えていたが、今と比べたら明らかに星が多かったように思う。それどころか、今の夜空はほとんど星を見ることはできない。私の目が悪くなってるからか、夜が明るくなってるからか、それとも大気汚染が進んでいるからかはわからないが、今の夜空にロマンもへったくれない。そんなことを考えながら、星空の残骸をふと見渡すと、自然と月が目に入った。月だけは昔と同じ銀白色で空にかかっている。

今も昔も変わらない月を見てなんとなく思ひ出すのが、阿部仲麻呂の「天の原ふりさけみれば春日なる三笠の山にいでし月かも」という句である。唐で見た月も日本で見た月も同じ月なんだなというような意味の望郷の和歌であるが、そう考えれば今の人も昔の人も同じ月を見ているのだらう。月を見て昔の人は何を思ったのだろうか。

どこの文化でもそうだが、太陽と月は人間にとって重要な信仰対象だった。太陽は強くて不変で絶対的な存在であるが、月は形や軌道が毎日変化し、またそれが一定の法則性を持つ移ろうものである。自然、人間には月の方が観察しやすく、暦を作りやすい。暦を作りやすいということは人間の生活を支配するということがある。月への信仰はその神秘性だけでなく、こういうところからもきているのだらう。また月は干満を支配することを昔の人は経験的に知っていたため、月は地上の水の支配者ともされていた。人間にも大量に水が含まれてることからだらうか、月は人間の精神に影響を及ぼすという考え方も古くからあった。現代でも月は人間の生理的、精神的現象(有名なもので妊娠など)に影響を及ぼすという俗説が残っている。

英語の狂気を示す単語 Lunatic には月を示す言葉である Luna がある。狼男の伝説も、月を見て狼男は狂うが、ここからも西洋の月に対する畏怖が伺える。西洋では月は狂気のような不気

味な存在だったのかもしれない。そのことと関係はあつてなくなつてか、西洋では早々に太陽暦を採用している。卵が先か鶏が先かの話になるが、太陽のもつ絶対的な力強さが西洋人に合ったのだらう。一方で東洋、日本では長く太陰暦(詳しく言えば太陽も考慮した太陽太陰暦)を使っていたが、どうやら昔から太陽への信仰よりも月への信仰のほうが強かつたようである。和歌にも月のほうが断然多く詠まれている。月見の習慣などからもわかるように、月は昔から愛された。移ろいを示す月のほうが日本の気質と合つたのだらう。日本に限らず、東洋では月は神秘的なものとされてきた。

今でこそ夜は明るくなつたが、昔は新月の晩は本当に何も見えなかつた。世界は完全に夜の闇に支配された。逆に満月の晩はより光があふれていたように見えただらう。夜は人間にとっては本能からわきあがる恐怖であり、死のイメージを持つものであつた。そんな夜の中に輝く月は死の世界の支配者のようにも見えるし、またひと際美しいものにも見える。月は死者の還る場所とされた。科学で塗り固められた現代もその例外ではない。どれほど科学が発展しても人は夜が持つ恐怖を消すことはできないし、月の持つ神秘性もなくすることはできない。近代科学は自然を機械とみて、自然を管理し、支配する発想に基づいて発展してきたが、夜がネオンに彩られても、月はひっそりとそこにある。

もう一度月を見上げてみる。子供の頃は、月は空にあげられた異界への孔のように思えた。月は地球ができたのとはほぼ同じ時期にできたというが、そのときから月は地球を見続けているのだ。今も昔もこれから先も人間は同じ月を見て同じような思いに駆られるのだらう。人間だけでなく、地球に住むさまざまな動物も月のもとに生きている。すべての魂は月によって共有されているのだ。そんなことを考えてると、今では、月は世界の誕生から世界が燃え落ちるその日までを視続ける虚ろな目のように思えるのである。

きんのおの・ぎんのおの

ある日、いつものようにおっさんが斧で木を切り倒そうとしたとき斧から手が滑って森の泉に大事な斧を落としてしまいました。飛んでいった斧はトマホークと化しました。

斧を無くしたおっさんが困っていると、なんと泉の中から2つの斧を持った女神が現れたではありませんか。女神はおっさんに落とした斧がなんだったのかをたずねます。おっさんが正直に答えると、その誠実さに感心した女神は、褒美として自分の持っていた2つの斧をおっさんに与えたのでした。

こうして銀の斧と石の斧を手に入れたおっさんは、何だか釈然としない気持ちで家路に着きました。

氣に入っていたおっさん自慢の金の斧の事は今でもたまに思い出すそうです。

銀ちゃんと初めて話したのは通学路で僕が上級生たちに絡まれているときだった。

銀ちゃん

原因はかばん持ちのじゃんけんで負けた上級生がいつも通り僕にいちやもんをつけ始めたことで、僕が珍しく反論したことだった。じゃんけんの勝ち負けはあくまで形式的なものであり、実際のところは上級生が力任せでかばん持ちを決めるのである。殴られるよりかは諦めて五人分のランドセルを二本目の電柱まで運ぶ方を選んだし、大抵の場合は一回運べばその日は勘弁してもらえた。そんな僕が上級生に反抗したのもたまたま妹と一緒にいたからである。兄として三つ下の妹の前では情けない姿をどうしても見せられなかった。かといって上級生に立ち向ったところで勝てるわけでもなかった。小四で身長百三十センチを越えてなかったのはクラスで僕一人だけだったし、ケンカしたこともほとんどない。

そんなときに通りがかったのが同じクラスの銀ちゃんだった。銀ちゃんは僕と違い体も大きかったので、クラスメイトからは一目置かれていた。銀ちゃんは僕が上級生に絡まれている状況を見て一目で判断したに違いない。醜態を晒す目撃者が一人増えた、と思ひさらに憂鬱な気分になった。

「T、なにしてんの？」と銀ちゃんは上級生を睨みながら僕に近づいてきたのは正直意外だった。突然現れた銀ちゃんを上級生は中学生と勘違いしたのかもしれない。上級生は去っていった。銀ちゃんはそれを見て表情一つ変えずに駅の方へ向っていった。

翌日、給食当番だった僕はこっそりと銀ちゃんのソースやきそばを大盛りにして渡した。「ありがとな」銀ちゃんはそっけなくお礼を言って席に戻った。

これがきっかけで僕と銀ちゃんは話すようになった。「昨日は何した」とか「今日の給食なんだっけ」とか他愛のない会話だったが、銀ちゃんも僕も友達が少なかったのでもしかしたら仲がよかったのかもしれない。銀ちゃんは口数も少なかったし、いつも一人でいる事が多かった。銀ちゃんは自分のことをあんまり話さなかったが、僕が銀ちゃんと仲良くなれたのも不思議だった。

結局、銀ちゃんと一緒にいた一年半だけで、僕が転校してからは全く音沙汰がない。僕が転校することについて銀ちゃんは何も言わなかったし、僕もなんだか切り出しづらかった。

あれから七年。風の噂で聞いたのだが、銀ちゃんは中学を卒業した後、地元の工場に就職し今は同い年の奥さんと結婚しもう子供もいるとか……

今でも思うのだが、僕がソース焼きそばを大盛りにしたとき、少しだけ微笑んでいたとおもう。

最高の笑顔

「・・・そろそろかな。」

できあがった写真を手に取る。すぐに、彼女の笑顔に目を奪われる。昔の人は写真を撮られると魂が抜かれるとか考えたらしいけど、むしろ魂を抜かれるのは写真を見る方じゃないのか、そんな気がした。でも、まだ駄目だ。僕の記憶にネガなんかよりよっぽど深く刻まれた彼女の笑顔、あれを僕は写したかった。

ここしばらく、ほとんど暗室で生活している気がする。最後にきちんとした食事を摂ったのはいつだったかな。だけど、ここで止める訳にはいかなかった。僕を不思議な使命感が突き動かしている。僕は、また薬品の準備を始めた。

出来上がりを待つ間、写真を撮ったときの思い出が自然と溢れ出してくる。いけない、今は目の前の作業に集中しよう。この仕事を終えたとき、僕の中で何かが奇麗になるような気がしたのだ、写真の原理みたいに、つまり銀塩が還元されるように。

「・・・できた。」

結局、あれから何日も経ってしまった。写真の中の彼女が僕へ微笑んでいた。僕の最高傑作かも知れない。時間がギリギリだ、今度はこれを届けに行かなくちゃいけない。僕は急ぎ足で、久々に外へ出た。

次の日、僕は会場へと向かった。実は苦手な場所だ。静かに中に入ると、彼女の写真はきれいな額縁に収まっていた。影一つない、そんな微笑み。自然に僕も彼女へ微笑み返す、そうしようとしたときだった。僕の膝の力が抜けた。僕は彼女の前でうずくまった。肩が震える。そうだ、今まで僕をギリギリのところまで支えていたのはあの使命感だったんだ。人目も憚らずに、僕は泣いた。あまりにも奇麗な、最高の笑顔の前で。もう、苦手なお線香の匂いも気にならなかった。

夢き銀色の夢

普段と変わらない朝の通学路。

道の真ん中に光り輝く物が映る。それは紛れもない銀色の夢だった。私は学校を放り出し、

夢を片手にあの場所へ向かう。

椅子に座り、たった一つの銀色の玉に願いをこめる。

そして目を瞑り

ハンドルを回した……

だめでした

死闘の果てに

今、俺は剣を片手に古塔の頂上に立っている。そして俺の目の前には、銀色の巨竜が獲物を捕らえるような目つきでこつちを睨んでいる。今宵俺は村を守るため、あの白銀に輝く巨竜を倒さねばならない。「ガオオオオオオオ！」。俺が剣を構える前に巨竜は、凄まじい咆哮と共にその大きな口から火炎弾を放ってきた。「くっ！」。柔道の受け身のような体制をとり、迫り来る火炎弾を回避した俺はすぐさま巨竜のもとへ駆け寄り、巨竜への反撃を試みる。しかし、巨竜の体を覆っている銀のうろこは鋼鉄のように堅く何回も斬ると逆に剣の方が折れてしまいそうだった。足下を攻撃されていることを悟った巨竜はその大きな翼で羽ばたき、俺の剣が届かないよう上空へ飛んで行ってしまった。「ガオオオオオオオオ！」。再び大きな咆哮と共に空からいくつもの火炎弾が降ってきた。「ちっ、空から攻撃とは卑怯な奴め……」。かろうじて火炎弾を回避した俺は、巨竜に場所を悟られないよう真下で待機をしたが、巨竜が下降してくると共にその翼から出る強風によって吹き飛ばされてしまった。巨竜が地面に着いたのを確認し、俺は剣を構え再び巨竜へと向かっていった。「うおおおおおお！」。大声をあげながら俺は巨竜の足下に斬りかかると足下のうろこが剥がれ、巨竜は「ガアアアアアア！」と悲鳴を上げた。どうやら俺の攻撃は効いたらしい。俺は攻撃に夢中になり、巨竜が体を回転させその長い尾で俺をはじき飛ばそうとしているのに気がつかなかった。怒濤の攻撃で刃こぼれした剣を研ぎ直すため、俺は巨竜の足下から離れようとした……その時……「バシン！」。巨竜の長い尾が俺の顔面を直撃した。……そして俺の視界が真っ暗になった。

次の瞬間俺の目に映ったのはバッテリー切れを示すマークの点灯した、PSPの画面だった。

しる☆あく

「お前つて……そんな奴だったのかよ……」

ユウキは、俺のベッドの壁際まで引いて、信じられない

という顔をしている。

「な、何だよ……お前いいつて言つてただろ！」

俺は焦った。ずーつと今日のために頑張つてきたから、ユウキも絶対受け入れてくれる。

そう確信したからやったのに、

ここまで拒絶されるなんて、思いもしなかったから。

ユウキは恐怖の下に絶望と侮蔑を覗かせながら、呟く
「信じてたのに……最高のダチだつて……」

……ッ！

散々、俺を煽つておきながら……！
思わず、カツとした。

「……うるせえ！俺だつて、そういう欲求はあるんだよ！」
俺は開き直った。下心があつたつて。

自分は、欲望のままに生きる汚れた人間だつたつて。
そのためには、手段を選ばない人間だつて……

「……するからな……（カチャカチャ、ゴソゴソ）」

そう宣言して、俺はブツを取り出し、ユウキに見せ付けた。
俺はもう止まらない。

今回を逃したらもう後はない気がするからだ。

「うそ……だろ……」

ユウキは絶望的な声を上げてうめいた

「おまえ、合コンとかになると急に頑張つて

シルバーアクセとかしちやう奴だったのかよ……」

ユウたんは俺の部屋にあるフィギュアを全部壊して泣きながら走つて出て行つた。

銀貨十枚では救えない

僕は孤児だ。両親は僕が小さい時に亡くなり、僕を引き取ってくれる親族もいなかった。育ててくれる身寄りのいなかった僕は町の孤児院に引き取られることになって、以来そこで暮らしてきた。

ちょうど1週間前、僕は奴隷商人に誘拐された。手足を縛られ、猿ぐつわを噛まされた上で檻に入れられて、知らない大きな街に連れてこられた。商人は僕を売るつもりなのだろう。僕は奴隷になるのは嫌だ。だけど、そんなことを言えるはずもなく、僕は商人の元でひどい暮らしをしている。

知らないおじさんが銀貨十枚で僕を買うことになった。しかも、おじさんは僕を助けてくれると言った。僕が自分以外の奴隷の方を見渡すと、みんな虚ろな目で僕を見ている。助かる僕が羨ましいのだろうと思い、檻から出された僕はおじさんと一緒に外に出る。

「さあ、君は自由だ。これからはあんなのに捕まるんじゃないぞ」

「ありがとう、おじさん」

そうしておじさんは去っていく。僕は自由になれたことが、とても嬉しかった。

さあ、これで家に帰れると思った時、僕は気がついた。自分が何処にいるのか、孤児院がどこにあるのか、そしてこれからどう生きればいいのか、何もかもがわからなかった。僕の手元にお金はない。あるのはボロボロで汚い服。こんな身なりをしているせいで、どこにも入れてもらえず、誰も相手にしてくれない。僕は無力だった。家に帰るところか今生きることさえもできないのだと知った。

僕は路地裏で膝を抱え込んでいる。もう三日はまともなご飯を食べてない。空腹が目がかすむ。そこにあの奴隷商人がやってきた。

「生きる当てが無いのなら俺のところに戻って来てもいいんだぜ」

僕はひたすらに無力だった。そして数日で檻の中へ戻ってしまった自分が情けなかった。檻に戻った僕をみんなが迎える。ある子が僕に言った。

「君も戻ってきちゃったんだね」

僕が檻を出る時になぜみんながあんな目をしていたのか、その意味を僕はようやく理解したのだった。

第四次世界大戦、そう、あの最悪にして最終の核戦争から百五十年が経った。わずかに生き残った人類も今は活気を取り戻し、文化的な生活を送れるようになってきた。それは明らかに俺達エレメントチルドレンのおかげであろう。俺達は、核爆発により遺伝子に異常が生じてしまった者達の子孫だ。短い寿命と引き換えに、俺達は元素を一人一種類だけ自在に操ることが可能になったのだ。この能力により人類の復興は十倍の速さになったと言っても過言ではないだろう。しかし、強い力は争いも引き起こす。五年程前からエレメントチルドレンをリーダーとした紛争が世界中で勃発していた。これを危険視した『七長老』は統一独裁国家を作り、最強のエレメントチルドレンを皇帝とすることに決定した。一対一で生き残った者を勝者とする単純なルールのサバイバルトーナメント『エレメントチルドレン最強決定戦』の開催だ。

エレメントチルドレン

「レディースアーンドジェントルメン！超人達の死闘もついに2試合目！早速選手の紹介だア！西ゲートから入場するは、優勝候補、E R 3地区の暴れん坊、ススマミれの最強拳士、ゴードン・バタフライ！」歓声に包まれながら今日の俺の対戦相手ゴードンが歩いてくる。ススマミれとか何というか、全身真っ黒だ。おそらく、炭素遣いなのだろう。「ゴードンに立ち向かうは！全くの無名ながら、1試合目では華麗に臭素遣いのキノラッチを倒した、銀色の鎌がトレードマーク、シルビア・ジャクソン！」黒服の男がバトルフィールドに行くよう合図をする。鎌を背負いゲートをくぐると、観客の歓声はなく、かわりにざわざわと話し声が聞こえてくる。そりゃあ無名だもんな、しかたねーよ。「両者とも準備はいいかア？レディー……フアイト！」開始の合図とともに奴は話し始めた。「エレメントチルドレンってのは能力に頼りっぱなしの奴ばつかだ。でも俺は違う。能力も肉体も極限まで鍛え上げた！雑魚は散りな、シャドウムーブ！」き、消えた？いや違う。全身の炭素を操り高速で動いているだけだ。

そして後ろにツ！「ほう、さすがに避けるか。しかしお前はそのままじゃ勝てない。そしてこれからも絶対に勝てないのさ！」「……なぜ、そう言いきれる？」「エレメントチルドレンは一種類の元素で作られた物体を自在に操れる。しかし、操る物体が複数になると話は別だ。右手と左手で違う計算問題を解くようなものだからな。つまり……」そう言うとき突然俺の目の前に飛んできた！まずい、避けられない！こうなったら鎌で……「そうだよな、避けられなきゃ武器でガードするしかねーよな。それを俺は粉々に粉砕する！粉々となった銀をお前は操れない！ダイヤモンドチェスト！」そう叫びながら俺の鎌の刃の部分をダイヤモンドの拳でぶつ叩いた！銀の刃が粉々にはじけ飛ぶ……と奴は思っていたのだろうが、実際は鎌が波打っただけだ。「な、なぜだ！俺の拳はすべての固体を破壊する！なのになぜその鎌は壊れないッ！？」「すべての固体を、か。それはすごいな。でも残念ながらこれは固体じゃない。」なに！ま、まさか！「ふつ、さすがに気づいたか。「俺は水銀遣いだ。」「くつ、シャドウムーブ！」そう叫び奴はいなくなった。おそらく作戦を練り直すために時間を稼いでいるのだろう。でも。「目で追えないからって消えたわけじゃないだろ？シルバレイン！」水銀の鎌を上空に放り投げてから爆発させる！無数に散った水銀は重力に従いバトルフィールド中に降り注ぐ。「ぐおおおお」水銀でバランスを崩した奴がものすごい勢いで地面を滑ってくる。「ふん。お前の誤算は銀と勘違いしたことだけじゃない。」奴はよろよろと立ち上がる。「なに？」「俺は物体を百八個まで操れるのさ。」そう言う俺は手を前に伸ばす。同時に奴の全方位を水銀の小さな玉で囲む。「ち、ちくしょー……ッ！」「シルバブレッド！」俺は手を下ろすと同時に全ての水銀弾を奴にぶち込む。「あばよ。なかなか面白かったぜ！」そう言い俺はキメ顔で振り向いた。「お兄ちゃん……なにやってるの？」そこには俺の一人妄想芝居を見て、口をポカンと開けた妹がいた。白い目で見つめる妹。身動きの取れない俺。今、世界が凍りついた。

シルバー

銀は金・プラチナなどと並んで貴金属の一つに数えられる。貴金属はその美しさ、希少性、耐食性などに優れるため、古くからジュエリーに使用されてきた。しかし貴金属は一方で、その性質や金属の持つパワーから魔よけやお守りとして使われてきた。

銀については古来より世界各国で様々な言い伝えがあり、幸運と魔よけのシンボルとされてきたが、その言い伝えは、幸せになる、恋人が出来る、裕福になるなど、どれもがプラスのことなのである。その理由はどこにあるのだろうか。

銀はすべての金属の中で最も可視光線の反射率が高く、磨くことによってプラチナよりも強い輝きを出すことができる。また自然の状態から純粋な金属を分離する作業が、金のそれよりも難しい。これらの理由から古代において銀は金よりも重宝されていて、古代エジプトでは金に銀のメッキを施すことさえあったそうだ。

伝説では、銀は月の金属、金は太陽の金属であり、銀はそのやさしい色から三日月と結びつき、月の女神として崇拜されていた。ローマ神話に登場する女神のひとりディアナは、狩りと森の神にして、銀の靴を履き、銀の馬車を操って、銀の星の瞬く青い夜空を駆け巡る、月の神とされる純潔の女神である。

つまり銀には、銀それ自体の持つ清廉なイメージがあるのであり、人々はそれに魅了されたが故に、銀を神話にも登場させたし、今も装飾品に使うのである。またこの銀の清らかなイメージと、夜空に瞬く星の持つ無垢なイメージが重なり合うからこそ、星は「銀色に輝く」のであり、銀河は銀河と呼ばれるのである。

今日シルバーアクセサリを付ける女性たちは、もしかすると「現代のディアナ」なのかもしれない。

白より白い世界

深々とした音に

目を 醒ます

窓を 開けると

……白い

景色も 吐息も

手を 伸ばすと

…ポツリ

指に 触れる

刹那の 欠片

ポツリ…

またポツリ…

絶え間無く 続く

やがて 掌を染め

草木を 染め

道路を 染め

この街を 染める

白より白い

この銀世界

コンテスト結果

[Aの部]

コラム番号	コラムタイトル	点数	順位	特別賞
		まじょコメント		
A01	永遠に	3 pt	8 位	1 sp
		なだらかに降りてゆくレイアウトが、あたかもゆっくりと気持ちが寄り添ってゆくようで、フレーズの整いともども、しっとり浸れました。 銀セッションスタートにふさわしい、荘厳な表紙です。 特別賞：A g 酸化賞（銀が錆びる発想はなかったんですか？ →離婚です）		
A02	でじあな！	8 pt	5 位	2 sp
		トークの勢いで熱く一気に主張を噴出。どわーっ！その狙いが、とてもうまく実現できています。「カシャ！」の見せ方も、しっかりはまって、言いたいことを言い切ったぞという爽快感とともにエンディング。 一見マニアックトークに見せて、共感力大でした。 特別賞：アナログマ賞（アナログは不滅です） お昼前で賞（ゲロ吐くな!!） イチオシフレーズ：「ほんとゲロ吐いちゃうくらいショッキングだったね」×2 「カシャ！」		
A03	輝き	0 pt	12 位	1 sp
		折り紙という小道具を介して、昔と今との対比。さあ気持ちを切り替えようという思いを、「磨く」という動的なキーワードに託した工夫が、読者を味方にする親しみやすさになっていました。 特別賞：歌詞っぽいで賞（そのまんま歌詞にできそうなくらいキレイです）		
A04	猫になりたかった犬の話	8 pt	5 位	1 sp
		銀猫vs黒犬さん。まさに種族を超えた、これは……愛？ ファンタジックにτειねいに展開して、エグいシーンなしなのも好感度大でした。 特別賞：中谷君のイチオシ賞（ネコミミ萌えだそうです……）		
A05	とある休日の出来事	11 pt	2 位	1 sp
		ん？ここから始まるアヤシイ悪の結社ストーリー？ いろんな想像を誘ってくれます。 あーなるほど。宇宙人って銀色っぽいよね。 さっくり感がヒットして、銀セッションのシルバー・メダルともども、イチオシフレーズ大賞もお持ち帰りです、おめでとう!!! 特別賞：見なかったことに賞（しよう）（ベスト3には入れたくなかった） イチオシフレーズ：「全身が銀色だった」×2 「見なかったことにしよう。」×3		
		1 pt	11 位	5 sp

A06	簡単おもしろ科学実験	とってもキケンなアルミ箔のつくりかた。 注意事項部分で、しっかりタネアカシしてる親切さも二重丸。 シリーズ物の仕立てにして、今回は「乙女心をゲットする**」だよ、みたいにしても楽しい。 ユニークな狙いがしっかりヒットして最多特別賞ゲットです、おめでとう！ 特別賞：あの人に試したいで賞（あの人のが嫌いだから。）イタいで賞（9V電池が好きなので。）よい子はやめま賞（めっ！byママ）地味に怖いで賞（明るい感じの口調で恐ろしいことを言っている。）やってみま賞（作者は昔やったの？）
A07	京都再訪 金閣・銀閣	9 pt3 位0 sp 観光案内まいります。 CMのナレーションのような、きれいさで着地していただきました。NHK賞を出したいくらいに、ゆったりと静かなナレーションがここちよい。おめでとうブロンズ・メダル！ イチオシフレーズ：「金閣が目指した永遠の美と銀閣が目指した自然との一体感」
A08	銀世界	3 pt8 位0 sp 観光案内まいります、その2。 雪にあらず、塩の大地でございます。 まさかのボリビア。意表を衝いたところへ連れて行っていただいた企画力と、だんだん正体を見せてゆく旅の追体験気分の醸し出ししかたが、すてきでした。 デスバレー（カリフォルニア）を訪ねたことがあるのですが、あそこも悠久の自然を感じさせて、すごかった。
A09	幸	2 pt10 位2 sp エンゲージリング？それとも結婚指輪のほうでしょうか。 幸せな輝き。キラキラ感の演出がすてきでした。おしあわせに。 特別賞：結婚しま賞（結婚指輪にはでっばった宝石はついてないことが分かった。婚約指輪の方かな？）あせしわ賞（つらいこともある）
A10	ある、日常の一コマ	8 pt5 位0 sp あらあら。ほのぼのと良いお話かと思いきや。 ラストの父と息子の小さなスレ違いが、うん、人生こんなものだよな、と微苦笑を誘って、こつんと「何か」を突きつけてくれました。そんな、普通では終わらない、という工夫がGOOD。 イチオシフレーズ：「『金』より『良い』って書くんだよ」×2
A11	精霊の涙	9 pt3 位2 sp うわあ、いいなあこれ。金の斧ネタはととてもとても多かったけれど、ただの伝説いじりで終わらず、元の伝説が持っている、何か人を試すような精霊の「いやらしさ」をしっかりと炙り出して、それをみごとに打ち砕いたコンセプトがすばらしい。 そして、きれいなラスト！ まさかの予知夢を見せてくれたのは、きっと精霊さん

		かな？ おめでとうブロンズ・メダル！ 特別賞：口ぐせがひどいで賞（あまりに木こりが恩を感じないから） 夢か現か賞（現実性って大事だよね） イチオシフレーズ：「苦虫を数百匹一度に噛み潰したような表情」
A12	耐久強度基準下 回る	28 pt1 位0 sp なんと新聞記事！ 美濃囲いが強度違反でタイホ？ しっかり記事口調がサマになってて、楽しめます。 将棋ネタをここまで昇華した発想と構成力にブラボー！ な裏表紙でした。 発想よし、文章よし。圧倒的な強さでしたね、金メダルおめでとう!!! イチオシフレーズ：「振り飛車基準法」「攻め駒が足りなかった」「h A B U」

[Bの部]

コラム番号	コラムタイトル	点数	順位	特別賞
		まじょコメント		
B01	銀のスプーンは冷たく重い	7 pt	6 位	1 sp おおっとうならせます。 しずく？ がしたたってるところまで凝ったスプーン・レイアウトもすごいけど、そこに盛られた銀のスプーンの明るい面と暗い面＝幸せな生まれから一転して毒への恐れへ、という洞察が、スプーンごとさくっと刺さってきます。 レイアウトと内容の深みの両方が備わったグレート表紙でした。 特別賞：豆知識的レイアウト賞（レイアウトがすばらしい）
B02	永劫を視る目	7 pt	6 位	2 sp テーマは月。力作でした。 うーん、ちょっと詰め込み過ぎちゃったかな。まるで地球を見守る「目」という流れは、とても説得的に作れていたの、前半三分の一くらいはカットしても良かったのでは。 調べたこと、捨てる勇気も正統派の試練。 特別賞：おつかれ様賞（長文だったから） まじめで賞（よんでいないざいあくかんから）
B03	きんのおの・ぎんのおの	12 pt	2 位	2 sp とっても多かった金の斧ネタ。こちらは 金＝銀＋石 というふうに登場順を入れ替えて遊んでいただきました。石斧って、石器時代か？ この入れ替えによって、どんな寓意が生まれたのかが、ちとつかめない。ナンセンス展開と読んでおけば良いのかな？ 金より偉い銀メダル（？）のほかに、トマホークがブレイクしてのイチオシフレーズ大賞もお持ち帰りです、おめでとう!!! 特別賞：そりゃ釈然としないで賞（おもしろかった） おっさんかわいいで賞 イチオシフレーズ：「トマホーク」×2 「トマホークと化しました。」×3 「あれはトマホークだった」「釈然としない気持ちで家路につきました。」「石の斧」
		0 pt	11 位	0 sp

B04	銀ちゃん	ペラペラしゃべらない寡黙な、まさにいぶし銀のオトコ、銀ちゃん。キャラがしっかり立ってます。ソース焼きそばのエピソードが、すてきに効いてていいね。 だから、TAさんからの贈り物付きでした。やったね☆
B05	最高の笑顔	22 pt1 位1 sp 遺影。しみり浸れます。「お線香」の一語だけで全てを表現したばかり加減もワザアリ。ラストの大泣きがぐっと来ます。 死者は何も語らないけれど、生者の支えになる。供養という言葉の思い浮かべました。 最高の賞「金メダル」をお持ち帰りください。おめでとう!!! 特別賞：ハヌマーン賞（哀しい笑顔もあるなんて。ラストで急に切なく……涙が出ちゃう。だって男の子だもん☆）
B06	儚き銀色の夢	8 pt5 位2 sp だめでした。そうですか。残念でした。 パチンコ玉。たった一粒の夢。フォントを変えてドラマチックに見せた遊び心が、いい感じです。 特別賞：パチンコはやめといたほうがいいで賞（パチンコという存在を忘れてました）確変賞（オチが面白い） イチオシフレーズ：「椅子に座り」「だめでした」×2
B07	死闘の果てに	0 pt11 位0 sp そんなバッテリー切れオチ。 とてもスピード感のある戦闘シーンで、わくわく気分を誘います。 ただ、勢いを重視したのかもしれませんが、吠え声で改行するとか、読みやすさへの配慮もあるととっても良かったか。
B08	しる☆あく	5 pt8 位0 sp ミスリード？ かなあ。 とりあえずフィギュア壊しちゃうのは気の毒すぎ。 タイトルの遊び気分が笑えます。 イチオシフレーズ：「ユウたん（はあと）」
B09	銀貨十枚では救えない	11 pt3 位1 sp 深い。自由なんて、そんな幸せなものじゃないのさ。 寓話仕立てで、人間を縛っているものは、人間を支えているものなのさと説得的に見せていただきました。 「目」に語らせたラストが、うまいなあ。おめでとうブロンズ・メダル！ 特別賞：FREEDOM & JUSTICE賞（FREEDOM!!! 盛り上がったから）
B10	エレメントチルドレン	5 pt8 位3 sp 妄想乙、ですね、まさに。 これだけ妄想全開なら、そんな夢オチっぽい醒めたオチは、いっそやめて、妄想のまま熱く激しくイっていただいてもよかったのでは。 それくらいに、作者さんがこの世界に没入しきっている気合いが、ふつつつとしてました。 特別賞：そろそろやめま賞（妄想オチはそろそろやめましょう）それはないで賞（笑）（兄さん、痛すぎる。） 厨二賞（もうこのオチはお腹いっぱい） イチオシフレーズ：「雑魚は散りな、シャドウムーブ！」「くっ、シャドウワープ！」「お兄ちゃん、何やってるの？」

B11	シルバー	2 pt10 位0 sp
		キッチリ語った正統派。ディアナをキーワードに持ってきた美しさも二重丸。 ラストがもったいない。あまりに日常に落ちすぎてしまった感。 正統派は特に、ラストでどれだけ自説をキッチリ印象づけられるかが勝負なのです
B12	白より白い世界	11 pt3 位3 sp
		アイディア秀逸。銀世界をこんなにもひろびろと窓の向こうに見せて。 「刹那の欠片」というフレーズも美しく決まった今週の読み納めでした。 印刷ミスは申し訳なかったけれど、滑り込みで修正できて良かったです。 おめでとうブロンズ・メダル！ 特別賞：ヒューホー賞（きれいだから） ざんねん賞（全部うつらなかったから） 白いで賞（誌面が白い、いやわら半紙）